

## 經濟哲學の現在

——左右田・杉村とそれ以後——

### 一 二つの視点

左右田喜一郎（一八八一—一九二七年）と杉村広蔵（一八九五—一九四八年）という二人の一橋の学究が經濟哲學という學問領域を創始し確立したことは、かつては周知の事実であった。左右田に關する限り、その活動は國際的な場で行われた。第二次大戰直後までのわが國の經濟學辭典のどれをとってみても、「經濟哲學」の項目には必ずこのことが記述されていた。辭典というものは、學問の動きを時の遅れを伴いながら近視眼的に追いかける傾きがある。最近の經濟學辭典では「經濟哲學」という項目が削除されていない場合でも、左右田や杉村への言

塩野谷 祐一

及は消えていることが多い。しかし、今日の經濟哲學をめぐる學問狀況の中で、左右田や杉村の業績は驚くほどの新鮮な現代性をもって浮び上ってくる。

本論文は經濟哲學の現在に照らして、左右田と杉村の業績の本質的な部分を顧みることを目的とする。始めに彼らの哲學を取り上げるさいの二つの視点を明らかにしておきたい。それらは、われわれが今日の經濟哲學の性格として重視するものであると同時に、彼らの業績の本質的な部分に属するものである。<sup>(1)</sup>

第一は、科學および思想の潮流についてである。左右田喜一郎が博士論文『貨幣と価値』を書いたのは、一九〇九年（明治四十二年）チュービンゲン大学においてであ

った。九年に及ぶ在外研究ののち、左右田は母校である東京高商および東京商大の講師と左右田銀行頭取とを兼ね、一九二七年(昭和二年)に四十六歳という若さで死去した。左右田が活躍したのは明治末期および大正期の全体である。杉村広蔵は左右田より十四歳若く、左右田のゼミナールに所屬して大正一〇年に東京高商専攻部を卒業し、昇格直後の東京商大の助手となり、一九四八年(昭和二十三年)にこれまた五十二歳の若さで死去した。杉村は第二次大戦終了時までの昭和前半期に学界で活躍をしたことになる。

このように、二人がきびすを接して活躍した時期は二〇世紀の前半に当たるが、この時期に西欧の思想界は一つの大きな思想的潮流の盛衰を経験したのであって、二人はこの潮流の興隆の中にあつた。この時期には、一九世紀から二〇世紀初頭にかけて盛んとなつた実証主義に対する批判と懐疑が支配的となり、とくにドイツにおいては理想主義ないし理念主義が台頭した。自然科学あるいは自然科学的方法のみが学問であるとみる実証主義に對して、自然科学だけが学問ではないという考え方が強くなり、文化科学、歴史科学ないし精神科学の思想が漲

った。ディルタイの『精神科学序説』<sup>(2)</sup> やリッケルトの『自然科学的概念構成の限界』<sup>(3)</sup> は理念主義的潮流の旗印であつた。左右田、杉村の経済哲学はこのような時代の背景をもつていた。第二次大戦後、理念主義は衰微し、実証主義が学界の主流を形成した。その結果、経験科学において哲学的考察は無意味な思弁として排斥された。しかし、最近、経済学をめぐる危機意識の高まりとも結びついて、経済社会における理念・意味・価値といったものを再考したり、経済学における概念・方法・認識の性格を反省しようとする哲学的試みが著しく目につくようになった。<sup>(4)</sup> そしてこれらの試みが、実証主義の盲点を衝く形で、理念主義の要素を含んでいることを否定することはできない。<sup>(5)</sup>

第二は、経済哲学として論じられる具体的な問題についてである。左右田と杉村はカントあるいは新カント派の哲学から出発し、そのさい価値および人格という二つの概念を重視した。一方、カントの認識論によれば、存在に先行して主観の側に先験的な形式がなければならぬ。これが認識における主観と客観のコペルニクス的転回である。新カント派はこの先験的なものを価値とし

て理解した。他方、カントの倫理學においては、その定言的命法にみられるように、目的としての人格すなわち単なる手段ではない人格という概念が基本であった。一九七〇年代に入って、道徳哲學および政治哲學の分野において注目すべき理論が展開された。それはロールズの正義論であつて、伝統的に支配的な影響力をもつていた功利主義への挑戦を意味するものであつた。これを契機として、社会科学の諸分野において規範理論の力強い復活が始つた。ロールズの理論は、上述のカントの二つの側面を含めて「カント的構成主義」と呼ばれる。今日の經濟哲學研究の最も活潑な部分がカント的系譜に属するということは、左右田および杉村の經濟哲學を取り上げるもう一つの視点を与える。

## 二 左右田の文化價值主義

左右田の業績は、一口でいえば、文化價值という概念によつて經濟哲學の確立を図ることであつた。これは杉村の左右田解釈によつても明らかである。一般にドイツ理想主義哲學は人生を價值生活と考へ、人間の活動を理想の実現を目指した發展の過程であるとみる。左右田は

リッケルトの弟子であり、文化價值の概念をドイツ西南學派から學んだ。ヴィンデルバントやリッケルトは價值を論ずるに當つて、基本的、内面的、理性的價值と、それらを実現し客觀化する行為を意味づける形式としての文化價值とを區別した。前者として宗教的價值(聖)、學問的價值(真)、倫理的價值(善)、芸術的價值(美)といった抽象的な價值が考へられ、後者の文化價值はこれらの價值から派生してくるものとみなされた。いしかえれば、前者の價值を実現しようとするさまざまな活動が文化であつて、これについて文化價值という概念が考へられたのである。

左右田も人間の活動や歴史は文化創造という價值生活であると見るが、彼の場合に顯著なことは、上述のように特定の價值を基本的なものとして位置づけるのではなく、文化領域とみなされるいっさいの領域における個々の文化價值を並列したということである。宗教、學問、倫理、芸術のみならず、政治、法律、經濟、技術、言語、教育などの文化領域にそれぞれ價值があり、それらが階層化されるのでなく、並列化される。左右田によれば、階層化には根柢がないといふのである。經濟の領域につ

いていえば、経済活動は価値のヒエラルキーの中では程度の低いものであり、人間の生存のために必要なやむをえざる手段であるという考え方が常識とすらなっていることを考えると、左右田の主張は杉村がいうように「価値の転倒」と呼ぶことができるかもしれない。

たしかにこのことの意義は重要である。左右田は他の価値と並列的な地位におかれた経済的文化価値によって、経済哲学を基礎づけようとしたからである。それまでの常識では経済と哲学とは異質のものと考えられており、経済を哲学の対象とみることは想像の域をこえていた。

ここで経済哲学とはどういうものであるかについて、一応の定義をしておくことが有益であろう。杉村は経済哲学の体系的な叙述を試みたさい、経済哲学を経済形而上学、経済論理学、経済倫理学の三つの分野に分けてい<sup>(11)</sup>る。経済形而上学はいわば経済に関する存在論であって、経済現象の内的な意味を理解する世界観を提供する。左右田の場合にこれに相当するものが文化価値主義である。この世界観の上に立って二つの分野が構成される。経済論理学は今日の言葉でいえば経済学に適用された科学哲学あるいは認識論である。これは経済学を形成する手続

と論理を究明するものであるが、杉村によれば、現象の中に内在する意味によって統一された経験世界の認識体系としての論理を明らかにしようとする。次に、経済論理学は経済を評価する規範を究明するものであるが、杉村によれば、経済に内在する意味によって規制された経済体制の倫理を追求する。これは経済制度との関連における道徳哲学といってよい。科学哲学および道徳哲学はそれ自身で存在すると考えられるが、左右田や杉村の場合には、今述べた定義から明らかかなように、それらは経済形而上学と不可分に結びついている。経済哲学に関する左右田の主たる仕事は、経済形而上学としての文化価値主義を基礎とする経済学認識論であった。

左右田自身はジンメルに従って、経験科学としての経済学の上限に経済の意味や目的を問う形而上学を置き、下限に経済学はいかにして可能かを問う認識論を置き、両者を経済哲学とみなした<sup>(12)</sup>。そこでは形而上学と倫理学とは未分離のようであり、左右田の主な業績は認識論にあった。

以上のことを基礎にして、左右田の仕事の中から三つの重要な問題を取り上げよう。それらはいずれも文化価

値にかかわる。

(一) 認識目的としての文化価値

経済世界を発見し把握し叙述するためには、一定の科学的方法を必要とする。しかし、最近の科学哲学が明らかにしているように、理論的概念構成はなんらかの世界観に基づかなければならない。シュンペーターの言葉によれば、理論はヴィジョンを前提としなければならぬ。このヴィジョンが世界観である。われわれは先に実証主義と理念主義との対立に触れたが、両者の経済世界観のとらえ方は異なる。英米系の実証主義においては、仮説の形成そのものがどんなに臆測や主観に基づくものであろうと、認識結果としての経済世界は客観的な法則によって秩序化されているとみられる。そこでは法則的秩序の存在する世界が予定されており、客体として作動している経済的メカニズムの発見が問題とされる。それに対して、ドイツ系の理念主義は世界を認識主体が想定する文化価値の妥当する世界として考える。経済は、人間が経済的文化価値の実現のために努力する意識的な精神活動とみなされる。この考え方によれば、一般に社会科学は、自然科学が自然現象を眺めるように、そこに存在し

ている一般的なメカニズムを明らかにするのではなく、人間のつくり出した精神文化としてのユニークな活動を、その目標とみなされる価値に関係づけて究明することが必要となる。したがって経済世界について叙述されるものは、普遍化された経済的メカニズムであるよりも、個別的に意味のある経済的文化である。

左右田は経済学概念構成を論ずるさい、カント認識論の立場に立って次のように主張した<sup>(13)</sup>。混沌とした経験素材がわれわれに何を取り何を捨てるべきかの選択を教えるのではなくて、われわれがある先天的な主導観念を持つことによって始めて現実を概念的に構成することができる。そしてこの主導観念が何であるかは、経済学の認識目的としての経済的文化価値によって規制される。

この文化価値は規範であって、規範にかかわらず始めて始めて経済生活の認識が可能となり、その認識に応じた経済学が成立する。左右田は経済学の主導観念として貨幣を挙げ、経済的文化価値は経験的、実質的、内容的なメルクマールとしての貨幣の概念に関連づけられた限りでとらえられるとみなす<sup>(14)</sup>。しかし、のちに杉村が論じたように<sup>(15)</sup>、左右田においては文化価値は内容規定を許さない

形式的規範としてのみ考えられたために、貨幣の概念と経済的文化価値との間の内面的な関係がまったく論じられていない。これは明らかに欠陥である。

この左右田の議論の中には、リッケルトの自然科学と文化科学との対比という問題点が含まれている。リッケルトによれば、自然科学は没価値的観点から現実の一般性・普遍性を認識するが、文化科学は価値関係的観点から現実の特殊性・個別性を認識する、というものであるが、左右田は経済学は対象の歴史的個別性を知るという認識目的に基づいて、なお表面的には一般化の方法をとらうると述べた。しかし、われわれは左右田の議論の中心はむしろ實在論的方法論への批判であったと考える。そしてこれは自然科学と文化科学との相違をこえて成立するものである。「純理経済学の概念構成上の嚮導概念としての先天的要素を宣明し、兼ねて此の要素に係りて経済学上の総ての概念が従来の如く實在論的でなく觀念論的に構成せらるべし」というのが彼の中心的論点である。彼は対象と概念との實在論的結合を拒否するのであって、彼の用いる實在論対觀念論という言葉は、今日の科学哲学の言葉でいえば、實在主義対規約主義 (realism

vs conventionalism) と表現してよい。つまり左右田は、概念はあらかじめ實在するものではなく、認識目的に照らして觀念的に構成される規約にすぎないというのである。

左右田はこのように経済学の主導觀念したがって認識目的という問題を通じて経済哲学の研究に向ったのであるが、その動機は学問としての経済学の独立性ないし自律性の根拠を明らかにすることであった。左右田は貨幣論とくにクナップの貨幣固定説から研究を始め、貨幣の根拠が法律的な秩序すなわち国家権力に求められていることを知った<sup>(17)</sup>。経済生活は貨幣との関係によって定義されるから、これでは経済学の独立性は保証されていない。また理論経済学一般は人々の欲望を所与として、それを充足する財の生産・分配したがって資源の配分を経済行為とみなしている。左右田はこうした概念構成をとることの根拠がなら自覚されていないと論じ、これを心理主義と呼んだ<sup>(18)</sup>。そこで彼は経済学の学問としての根底的性格を規定するものは何かを尋ねて、経済哲学の研究に向ったのである。のちに述べるように、シュンペーターも同じころ同じような関心を抱いて、経済学を経済学た

らしめる根底的なものは何かを同じように方法論の観点から考え、処女作『理論経済学の本質と主要内容』を書いたのであった。<sup>19)</sup> 両者の間の決定的な相違は、左右田の理念主義に対して、シュンペーターがこの書物においては明らかに実証主義をとったということである。

(二) 文化価値の根拠としての創造者価値

第一の問題が理論とヴィジョンとの関係であるとすれば、次に取り上げる第二の問題は個人と社会との関係である。左右田は文化価値の意味解釈を天才的な創造者の活動に求めた。<sup>20)</sup> 上述のように、彼は経済生活をも含む人間の活動を価値生活と見るが、その価値生活の中心観念として文化創造という概念を考える。人間の活動や歴史が意味をもち価値をもつのは、それらが創造的なことを行うからである。この文化創造は文化目的と人間目的という二面をもつ。文化目的はこれまでに述べてきた文化価値を意味し、人間目的は創造者価値を意味する。そして上述の認識目的としての文化価値の根拠づけが、人間個人としての創造者の価値によって行われる。文化価値と創造者価値との関係は社会と個人との関係を表わしている、というのが左右田の主張である。学問、芸術、倫

理、宗教、教育、政治、経済、技術などの文化領域において、個人の創造的な活動は個性的人格の自由な発現として創造者価値をもつ。この創造的成果はやがて協同的社会の中に取り入れられ、文化価値として実現されていく。左右田は二つの価値は極限においては合致するが、現実には必ずしも合致しないで、平行線を辿ることがあることを強調する。

左右田が創造者価値という概念を提起したのは、おそらくカントの人格概念およびドイツ・ロマン主義の思想を受け継いだからであろう。目的としての人格という考え方によれば、人間は互いに他の誰の人格によっても置き代えることのできない、それ自身としての固有の意義と重要性をもつ。人間は平等に創造的な活動に参加する可能性を秘めているからである。そのような人格は完成された伝統的秩序に挑戦し、社会を支配している既存の文化価値に反逆する。しかし、左右田は文化価値と創造者価値との間、あるいは社会と個人との間に起こる不一致を強調し、それを悲観的に描いている。天才は必ずしも社会に受け入れられるとは限らず、悲惨な運命に泣き、孤独の悲哀に耐えなければならぬという。

先に言及したシュンペーターもまた諸文化領域の間の相互依存的並列関係を強調し、各領域における創造的革新者を指導者と呼び、彼らの革新が各領域の動態的發展を導くと考えた。<sup>(21)</sup>シュンペーターの経済發展理論は特に経済の領域についてこれを論じたものであった。彼は創造者の挫折よりも成功の場合を取り上げ、個人の創造的成果が社会全体を支配し、時代の方向を規定するにいたることを示した。これは左右田に従えば、創造者価値が文化価値に結実する場合である。左右田は文化価値と創造者価値との関係を社会と個人との関係としてとらえたが、シュンペーターはそれを静態と動態との関係としてとらえた。両者は同じ事態の異なった要素を強調したにすぎないが、シュンペーター自身はやがて自分自身の学問の社会的受容について左右田のいう天才の悲哀を味わったに違いない。

### (三) 極限概念としての文化価値

第三の問題として、左右田が極限概念という奇妙な言葉を用いて論じた問題を取り上げよう。<sup>(22)</sup>これは内容的にはザイン(存在)とゾルレン(当為)、事実と価値の関係である。事実と価値とは別のものであり、科学におい

ては両者は峻別すべきであるというのが一応の常識である。しかし、両者は相互に無関係に成立するものではない。第一、通常、事実は客観的なもの、認識における基底的なものとみなされているが、じつはそうではない。社会生活は社会科学の対象であるが、始めから特定の形をもって存在しているのではなく、観察者が文化価値という形式を適用して、いわば恣意的に浮び上げることによって初めて認識可能となる。このように認識の問題に関して、価値から事実への働きかけがある。さらに実践の問題においては、規範的な価値に照らして、事実が評価され、現実にどうあるべきかが指示される。前者の問題は価値関係であり、後者の問題は価値判断である。

第二、通常、価値は事実からは導出されないとみなされている。そのような導出の試みは自然主義的誤謬として批難される。しかし、価値や規範はそれ自身としては無内容なものであり、規範に具体的な内容を与えるものはむしろ経験的な存在である。当為は存在から離れては内容空虚である。

このように見ると、存在と当為はどちらも互いに他に依存するという相互依存関係が成り立ち、両者の間に不



即不離の關係がでてくる。もし存在と當為を分離して、両者がまったく無關係であると割り切ってしまったら、左右田の極限概念という考えは不必要となる。存在がある方向性をもって存在している場合、それは存在であるから、究極的な目的や規範に近づくことはできず、つねにギャップが残される。存在から當為に移るためには究極的な飛躍が必要である。しかし存在を無限に追求すると、極限として當為に至るというのである。つまり存在から當為へは無限の系列を通じて初めて到達できる。無限を通じて到達できるということは、けっして到達できないということであるが、經驗的内容を次第にふやし、その極限として先驗的な形式に内容を与えることができる。ザインをいくら積み重ねても、究極的にはザインからゾルレンへの飛躍が必要である。しかし、始めからザインが無制約的に存在するのではなく、むしろゾルレンがあつて、ゾルレンの方へ接近するようにザインを誘引している。このような即不離の關係をとらえようとしたのが左右田の極限概念であるように思われる。この立場は、一方において、形而上学的な規範だけを与えて、無内容なことに終始する立場に反対し、他方において、自

然主義的に存在を前提して、そこから規範が導かれると主張する立場に反対する。

しかし、左右田の考えは単なる比喩に基づいているにすぎない。比喩として次のような例が挙げられている。円の中に辺の等しい多角形を置く。三角形から始めて、辺の数を四辺、五辺、六辺というようにふやしていき、これを無限に近づけると円になる。また無限等比級数の系列を考えて、その収斂値を計算する。このような例によって極限概念が説明されているにすぎない。これは比喩によって問題を解決したかのように考えており、哲学的考察としては欠陥をもつ。しかも左右田は具体的には極限概念の考え方を經濟に適用し、經濟的文化価値は經濟生活の極限概念であるとみる。彼が經濟的文化価値に經驗的内容的制約を与えるものとして貨幣概念（およびそれと關係づけられた經濟価値の概念）を考えたことは上述のとおりであるが、彼が經濟的文化価値と貨幣概念との關係を問いながらも、抽象的な極限概念の議論によってそれを回避してしまったように見える。

## 三 杉村の経済哲学研究

杉村は経済認識論については、「方法なくしては学問はない」<sup>(23)</sup>という彼のモットーが物語るように、経済学の方法に関心を払ったが、主たる業績は経済形而上学と経済倫理学の分野にあったといふことができる。方法の議論も形而上学的世界観の反映であった。そのさい杉村は左右田のように西南学派の形而上学的、超越的立場に終始することに反対し、その立場を経験的、内容的に補完するように努め、また価値を実現する社会機構に注目した。これは同じ新カント派ではあるが、マールブルク学派の影響である。

## (一) 経済学の方法

杉村は社会科学が当然に問題とする個人と社会との関係について、二つの大きな見方の対立を論じた。<sup>(24)</sup> ニュートン主義の微分的構成とライブニッツ主義の発展的構成と呼ばれるものがそれである。前者は個人を社会を構成する極微量として単に外面的にのみとらえるが、後者は個人を内面的な自己創造的なものとして内側からとらえる。どちらも原子論的認識方法をとっているけれども、

前者においては個別的なものは、単に運動の契機としてのみ、あるいは合理化の契機としてのみ意義をもつのであって、後者におけるように、個別的なものが全体的有機的統一を可能にするものとして重視されるのではない。

杉村はこの二つの見方を西欧客観主義とドイツ主観主義の二つの潮流として位置づけ、また経済学の歴史の中では古典派経済学とドイツ歴史学派およびメンガーとの対比として位置づける。杉村は経済学史の書物が学説の陳列に終わっていることを批判し、経済観の論理を明らかにするものとして経済学方法をみずから提起した。<sup>(25)</sup> シュンペーターの学説史叙述も方法史という側面を含んでいるが、<sup>(26)</sup> 杉村は、科学の歴史は科学哲学ないし科学方法論の実践される場であるという認識を持っていたように思われるのであって、その認識はまったく現代的である。

## (二) 世界観としての経済性原理

杉村は昭和十年の白票事件のさいの学位請求論文において、経済性原理によって経済哲学の基礎を確立することを意図した。<sup>(27)</sup> これは彼にとって経済を見る世界観あるいは経済形而上学を与えるものであった。経済原則は自然現象の規則性とは違い、人間の実践の根底にある合理

的精神を表明したものである。彼のいう経済性原理はメンガアの限界効用原理の解釈を通じて与えられた。これはドイツ主観主義の潮流に立つことを意味した。

イギリスの古典派が実証主義的な世界観に立って、外面的な経済秩序の認識をえようとしたのに対して、オーストリー学派のメンガアは経済そのものの意義を問い、人間の内的な経済的実践の原理を求めたという点で、杉村はメンガアを著しく高く評価した。普通には、メンガアの理論も主観価値学説として心理主義的に解釈されることが多いが、杉村はそのような解釈は誤りであるとし、経済性原理を人間の個々の主観を超える歴史哲学的普遍性を表わすものと考えた。そしてさらに、経済性原理の具体化が貨幣経済であり、貨幣を通じて主観的な価値評価が客観化され、評価社会が成立する。経済活動はこの価値通約性の下で合理的秩序を形成することになる。貨幣機構の妥当性は単に貨幣経済の中のみあるのではなく、経済そのものの中にある。こうして杉村は経済全体を支配する客観的な原理として経済性原理を位置づけるのである。このような解釈は今日では新奇なことではなく、当然のことと考えられている。つまり欲望と資源

との間で経済は稀少性によって支配されており、資源の効率的配分が経済の基本原則であるということは、今日の近代経済学の教科書に書かれていることであるが、明らかにオーストリー学派的観念である。

上述のように、杉村は経済的文化価値と貨幣との内的関係づけが欠落しているとして、左右田を批判した。

杉村の場合、限界効用原理を人々の財の価値づけの内的原理として理解し、それが外面的に貨幣の評価を通じて現われてくる。このようにして、経済的文化価値の概念が経済性原理という内在的論理をもち、それが貨幣概念という外面的表徴と結びつけられるのである。

### (三) 社会倫理としての社会理想主義

リッケルトに従った左右田の文化価値主義に対して、杉村の経済倫理学の立場は社会理想主義と呼ぶことができよう。<sup>(28)</sup>これはマールブルク学派のナトルブに従ったものである。杉村によれば、文化価値主義は社会的な制約を考えずに文化理想を語っているにすぎない。また文化価値主義はカント的人格を重視するけれども、それがどういう社会的な文脈や機構の中で実現されるかというプロセスを考えていない。杉村はカント的人格概念を実現

するような社会機構を考えようとしたのである。これは、理念と社会性との結合という意味で、社会理想主義と呼ばれた。これが杉村の経済倫理学を主導する考え方であった。<sup>(29)</sup>

このように、杉村は従来人格主義が経済や制度機構から切り離され、抽象的、普遍的に考えられていたことを批判し、これを社会的な場の中に持ち込み、協同体としての社会の倫理は何かを問うたのである。これは、左右田がさまざまな文化領域における価値を平面的に並列したことの一つの帰結である。倫理的価値を社会の具体的な領域から切り離して抽象的に論ずるのでなく、またそのような倫理的価値を経済に対して天降りに適用するのでなく、これを社会の諸領域と同じ平面に持つてくることによって、倫理的な人格が社会的文脈の中でどのように実現されるか、また経済そのものに内在する倫理は何かが問われることになったのである。杉村の言葉でいえば、これが「場の倫理」である。人格は社会的な場の中で規定されている。したがって人格を抽象的な空間で論ずるだけでは意味がない。彼は経済合理性ないし経済性こそが経済倫理であるとまでいっている。すなわち、彼

は経済の意味としてとらえられた経済性原理は同時に近代における経済倫理であるとする。

左右田に比べて杉村ははるかに現実感覚に富み、経済学にそくした重要なテーマを取り扱っている。しかし(一)の世界観と(二)社会倫理との関係が整合的でないように思われる。世界観についての杉村の見方は、経済の意味を稀少性あるいはそれを基礎にした効率性ないし合理性という概念に求めるものであって、彼自身の言葉でいえば、経済性原理という経済観である。しかし、彼が社会倫理の問題として近代における資本主義の倫理を問い、あるいはさらに資本主義の後に来る制度の倫理を問う場合には、平等とか人権といった社会主義的な理念が社会倫理として考えられている。効率性が資本主義のある局面における経済倫理であることは、彼が強調するとおりであるが、彼自身においても次第に社会主義が思考の範疇として現われ、それが社会倫理の一つと考えられるようになった。これは今日の福祉国家につながる考え方であるが、この社会倫理は経済性原理という世界観の下ではけっして取り扱うことはできない。経済的効率性から平等や正義という考え方は導かれないのである。杉村は心情

的に社会主義とか福祉国家の問題を社会倫理として考えなければ、その問題を基礎づけるに足る哲学的ないし世界観的基礎を欠いていた。

#### 四 ドイツ理念主義とシュンペーター

以上の議論の中で、われわれは数回にわたってシュンペーターに言及する機会をもった。彼は現代の主流派経済学の尺度によっては測れない大きな存在であり、むしろ現代経済学に対する批判的存在と考えることができる。それは、彼が一見したところ実証主義の代表者のように見えながらも、実はドイツ理念主義の要素を大きな比重で持っていたことによるのではないかと思われる。われわれが左右田や杉村を論ずるさいにシュンペーターを引き合いに出したのは、両者の考え方の親近性と、それにもかかわらず無視しえない相違性とのためであった。今日シュンペーターの多面的な業績への関心が高まっているとすれば、彼と問題意識を共有した左右田や杉村の業績への回顧は、彼らがシュンペーターと異なる面を持つていただけに、かえって現代的意義を持つてであろう。

左右田とシュンペーター（一八八三—一九五〇年）とは

二歳違いの同時代人であった。両者は青年期にはともにドイツの経済学界の空気の中で育った。そしてともに学問としての経済学をどのような基礎の上に構築すべきかを反省し、経済学の認識論的研究から出発した。シュンペーターの場合、その成果が『理論経済学の本質と主要内容』（一九〇八年）であった。左右田がこの本を読んだかどうかははっきりしないが、シュンペーターは左右田の『貨幣と価値』（一九〇九年）を読んでいる。シュンペーターは若いころ、ウィーン大学の経済学雑誌『ツァイトシュリフト・フュア・フォルクスヴィルトシャフト』において数年にわたって書評を担当し、一度に十冊ほどの近刊書を書評していた。一九一一年の雑誌には左右田の『貨幣と価値』の書評がのっている。ただしほかの著名な学者の書物と比べて、左右田の本についての書評は短かく、二十行足らずである。左右田は無名であり、その書物はチュービンゲン大学の博士論文であった。シュンペーターの文章の全文を紹介しよう。

「このような学位論文はめったに現われるものではない。ここには非常に優れた思想的成果が含まれている。著者は一步一步の中に、若干一面的ではあるけれども、

根本的な哲学的、経済学的認識を示しているばかりでなく、大きな賞讃に値するほどの正しい洞察と理論的才能を示している。この書物は長く読むに値するものとして残るであろう。最近ドイツにおいて書かれていた貨幣理論に関する研究の中にはつまらないものが多いが、本書はその部類のものではない。／＼この書物は主として貨幣現象の本質という問題にかかわっており、おそらく必要以上に哲学的な言葉を使ってはいるけれども、心理主義的価値理論に基づいて貨幣価値という事実についておおむね正当な叙述を与えている。著者はクナップの国定学説の批判者であり、その論駁は成功している。ただし彼の積極的な主張の部分には、若干のマイナス面がある。

一つは、経済的事実とは関係のない、実際に使用できない社会的価値という概念を用いていること、もう一つは、著者が持ち込んだ社会学序論のために、少し思弁的な領域に踏み込んでいることである。<sup>(30)</sup>

経済学者としてのシュンペーターは思弁的な哲学に反対であり、そのことが右の書評の中にも現われている。彼は実証主義・反形而上学の立場にあり、左右田や杉村の理念主義とは対照的である。しかし、シュンペーター

が実証主義者の通常の範囲を超える問題を扱ったこともたしかであり、その点において左右田らとの問題意識の共通性を見出すことができる。

そこでシュンペーターの観点を取ってみると、左右田が言ったことは次のようなことになる。第一に、さまざまな文化価値を同じ平面に置き、それらの間に階層化を試みないという左右田の「価値の転倒」は、シュンペーターの場合には、経済、政治、法律、芸術、倫理、学問などのさまざまな社会領域が相互依存の関係としてとらえられることになる。ここでは唯物史観のような経済領域と他の領域との間の階層化が否定されている。諸領域の全体としての発展をシュンペーターは社会的文化発展と呼ぶ。

第二に、社会が異なった領域に区分されるのは思惟的な加工にほかならず、研究者が概念構成のための先天的な形式を適用した結果である。左右田の認識目的としての文化価値に対応するシュンペーターの考え方は、理論をつくるにはヴィジョンが必要であるということである。シュンペーターの場合、そのようなヴィジョンは経済的均衡秩序であり、左右田のそれは経済的文化価値

であつた。この限りでは、經濟を法則的秩序をもつたメカニズムと見る実証主義と、經濟を人間の精神活動としての文化価値と見る理念主義との対照は明瞭である。

しかし第三に、各領域の發展を規定する段になると、シュンペーターと左右田の創造的指導者の觀念は合致する。左右田は文化価値の根柢をこのような個人の創造性と人格の自己実現に求めた。シュンペーターは価値の概念を用いてはいないが、發展とか動態という概念によって問題としていることは同じである。

第四に、杉村のメンガー解釈にもかかわることであるが、杉村はメンガーの經濟性原理は歴史学派の眞意を歴史哲學的普遍性の次元に展開したものであるとみなし、オーストリー学派と歴史学派との共通性を主張した。この主張の是非は別としても、オーストリー学派から生れたシュンペーターが歴史学派の観点の一部に共感を示し、とくに社会生活の諸領域が不可分に関連し、全体として統一性をもつという観点、および發展という観点を継承したことに注目すべきである。これらの両観点を綜合したものが上述の社会的文化發展の概念である。歴史学派を一要素として含むドイツ理念主義は、このような社会

の全体的運動に関心をもつていたはずであり、これは社会の個々の領域について孤立系を想定する実証主義に比べて本来扱いえない問題であつた。シュンペーターは理念主義が提起した壮大な問題に実証主義の方法をもって取り組み、実証主義の限界を突破しようとして試みた人であつた。この試みの中で、シュンペーターは理念主義の本来の担い手である左右田や杉村と交叉しうるのである。

## 五 現代の課題

先に区別した經濟哲學の三つの分野にそくして、現代の状況とのつながりを展望しよう。

第一。左右田が死んだころ、ヨーロッパでは実証主義の大きな革新運動が起つた。一九二〇年代、オーストリーのウイーンを中心としてウイーン学団と呼ばれる哲学者および科学者の集団がいわゆる論理実証主義を確立した。これは一九世紀の実証主義に対して明確な方法論的、哲學的基礎を与えたもので、今日の科學哲學の分野がこれによって確定された。論理実証主義は検証可能性の基準によって知識の正当化を図ろうとした。しかしポツパーは反証可能性の基準を提案することによって、こ

の極端な実証主義の修正を行った。その後ハンソン、ク  
 ーン、ラカトス、ファイヤーペントらの異なった科学  
 哲学の立場が次々と展開され、今日に至っている。この  
 ような動きは実証主義がさまざまな角度から挑戦を受け、  
 動揺を示す過程であった。

左右田や杉村が認識論や方法論を重視したといっても、  
 それらは新カント派の形而上学に基礎を置いたものであ  
 って、対象の意味理解によって世界観を構築するという  
 ものであった。それらは理論と観察の関係、説明と予測  
 の性質、仮説の実証や正当化、科学的発見の論理、モデ  
 ルの構造といったような問題を含んでいない。したがっ  
 て彼らの経済哲学は、論理実証主義以後の科学哲学の要  
 素と結びつく契機をほとんど持っていない。新カント派  
 に特有の価値関係という観念は、仮説形成においてアプ  
 リオリな前提が必要であること、および概念構成におい  
 ては規約性ないし道具性のみが重要であることを教える  
 にとどまる。経済学方法論としての経済哲学は、左右田  
 の伝統とは無関係に新しい出発をしなければならぬ。  
 第二。それとは逆に、形而上学としての経済哲学は、  
 実証主義の動揺の中で復活の可能性がある。実証主義の

支配の下で排斥されていた形而上学は、科学的とみなさ  
 れていた経済学に隠されている独断的前提を明らかにす  
 ると同時に、新しい理論の構築のために経済社会に潜む  
 本質的な観念体系を読み取るうとする。現在この分野で  
 最も活発な活動をしているのは、新オーストリー学派の  
 主観主義である。<sup>(31)</sup>これは、ミーゼスやハイエクの影響下  
 にある人々が、ワルラス的一般均衡理論の中に吸収する  
 ことのできないオーストリー学派の真髓を再評価しよう  
 とするものであって、杉村のメンガー解釈を想起させる  
 ものがある。ただ新オーストリー学派の焦点は、不確実  
 性や期待を含む市場過程の解釈にあり、市場メカニズム  
 の機械論的見方を排斥しようとする。

そもそもミーゼスのブラクシオロジー(人間行為の理  
 論)やハイエクの自由論は、オーストリー学派から生れ  
 た形而上学の発展である。杉村はメンガーの主観主義的  
 方法を、生活の奥底に内面的省察をめぐらしてその先験  
 的意味をとらえようとする哲学的方法と解釈したが、ミ  
 ーゼスのブラクシオロジーにおける内観の方法が人々の  
 主観を通じて行為の目的合理的な一般形式を確立しよう  
 とするのと軌を一にしている。なお実証主義と結びつき



易い計画主義を排除し、自由を主張することが、現代の理念主義の特徴の一つのように思われる。いずれにせよ、現代の新オーストリー学派の主観主義との関連において、杉村のメンガー解釈は先駆的意義をもつものとして顧みられるべきである。

第三。經濟倫理學においても杉村の現代的意義は小さくない。彼は超越的な倫理によって經濟を評価するのではなく、經濟に内在する倫理すなわち經濟倫理に注目することを提案した。彼は經濟性原理を基礎として、經濟は効率性の支配する世界であり、近代の經濟倫理はこのような經濟的合理性であると結論した。しかしこれは明らかに言い過ぎである。稀少性から出発した場合、実はもう一つの原理的問題が經濟に内在している。それは、資源が稀少だから効率的に資源を配分しなければならぬのと同時に、資源が稀少だからそれからつくられたものを公正に分配しなければならぬという問題である。生産的効率と分配的正義とは同じ經濟性原理の二面である。杉村は經濟が自律的意義をもつようになる<sup>(32)</sup>と、正義のノルムも經濟的現実の中に見出されると考えた。これは重要な論点であって、經濟學が正義の問題を価値判断とし

て排除してきたことへの反省を迫るものである。

生産的効率の原理は社會倫理としては功利主義に定式化された。しかし功利主義は社會全体の効用の集計値を大きくしようとするものであって、全体のためには個々人の人格を否定することも許される。効率が效用という概念を基礎とするのに対して、正義は權利という概念を基礎とすべきである。これによって始めてカントの道德的人格の概念が生きてくる。杉村は功利主義を論じたさい、このような問題点に気付いていない。しかし彼は社會主義を論ずる場合には、正義の基礎として生存權の概念が必要であるとみなしている<sup>(33)</sup>。經濟性原理と並ぶ正義原理の定式化こそは、福祉國家の現實に内在する倫理を発見するという現代の經濟哲學の中心的課題である。

(1) その意味で、本論文は左右田および杉村の學說の全面的な解説ないし研究ではない。彼らについての叙述としては、次を参照。

『思想』新進哲學論文号・左右田博士追悼録、昭和二十年十月。左右田博士五十年忌記念會編『左右田博士への回想』創文社、昭和五十年。馬場啓之助『回想の左右田学派・その生涯と學說』第一部左右田哲學の展開』一橋の學問を考える會、昭和五十九年。

杉村記念会編『経済哲学の諸問題』新紀元社、昭和二十五年。同編『杉村広蔵博士を憶う』昭和二十五年。馬場啓之助『杉村学説の示唆するもの』一橋の学問を考える会、昭和五十七年。同『回想の左右田学派・その生涯と学説』第二部杉村広蔵博士・その生涯と学説』一橋の学問を考える会、昭和五十九年。

- (2) W. Dilthey, *Einleitung in die Geisteswissenschaften*, Duncker und Humblot, Leipzig, 1883. (山本英一・上田武訳『精神科学序説』上・下、以文社、昭和五四—五六年)
- (3) H. Rickert, *Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung*, 3 vols, J. C. B. Mohr, Tübingen, 1896—1902.
- (4) 佐藤隆三「最近の経済学方法論」『経済学史学会年報』第二四号、昭和六十一年十一月。
- (5) 社会科学における実証主義と理念主義の潮流の展望として次を参照。富永健一『現代の社会科学者——現代社会科学における実証主義と理念主義』人類の知的遺産79巻、講談社、昭和五十九年。この二つの潮流は、杉村広蔵がたえず引き合いに出した座標軸であった。
- (6) J. Rawls, *A Theory of Justice*, Harvard University Press, Cambridge, Mass., 1971.
- (7) 塩野谷祐一『価値理念の構造——効用対権利』東洋経済新報社、昭和五十九年。
- (8) 左右田博士記念会編『左右田喜一郎全集』全五巻、岩

波書店、昭和六年。

- (9) 杉村広蔵「文化価値主義の経済哲学」二木保幾・杉村広蔵『経済哲学』経済学全集第九巻、改造社、昭和八年。
- (10) 左右田「価値の体系」『全集』第四巻。
- (11) 杉村「改訂経済哲学通論」理想社、昭和十九年、七ページ。
- (12) 左右田「経済法則の論理的性質」『全集』第三巻、三三—三五ページ。
- (13) 左右田「カント認識論と純理経済学」『全集』第三巻。
- (14) 左右田「貨幣と価値」『全集』第三巻、第七章、「経済法則の論理的性質」『全集』第三巻、第三章。
- (15) 杉村「経済社会の価値機構」『経済哲学の基本問題』岩波書店、昭和十年。
- (16) 左右田「カント認識論と純理経済学」『全集』第三巻、二八—三三ページ、傍点は引用者による。
- (17) 左右田「貨幣と価値」『全集』第二巻。
- (18) 左右田「経済法則の論理的性質」『全集』第三巻、一三四—一四九ページ。
- (19) J. A. Schumpeter, *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*, Duncker und Humblot, München und Leipzig, 1908. (大野忠男・安井琢麿訳『理論経済学の本質と主要内容』上・下、岩波書店、昭和五十八年)
- (20) 左右田「価値の体系」『全集』第四巻。

- (21) J. A. Schumpeter, *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, Duncker und Humblot, Leipzig, 2 Aufl. 1926.  
(塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳『経済発展の理論』上・下、岩波書店、昭和五十二年)
- (22) 左右田「極限概念としての文化価値」『全集』第三卷。
- (23) 杉村『経済哲学の基本問題』ニスージ。
- (24) 杉村「経済社会の価値機構」『経済哲学の基本問題』九三ページ。
- (25) 杉村『経済学方法史』理想社、昭和十三年。
- (26) J. A. Schumpeter, *Epochen der Dogmen- und Methodengeschichte*, J. C. B. Mohr, Tübingen, 1914. (中山伊知郎・東畑精一訳『経済学史』岩波書店、昭和五十五年)
- (27) 杉村「経済性の原理」『経済哲学の基本問題』。
- (28) 馬場啓之助『回想の左右田学派・その生涯と学説』第

二部杉村広蔵博士・その生涯と学説』九ページ。

(29) 杉村『経済倫理の構造』岩波書店、昭和十三年。

(30) *Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung*, 1911, p. 245.

(31) 八木紀一郎「オーストリア学派の〈復活〉と歴史的オーストリア学派」『経済学史学会年報』第二四号、昭和六十一年十一月。

(32) 杉村『経済倫理の構造』四四ページ。

(33) 同上、二一三ページ。

(本稿は一橋の学問を考える会で行った同題の講演記録、橋間叢書第四十二号、昭和六十年七月を改訂したものである。)

(一橋大学教授)